

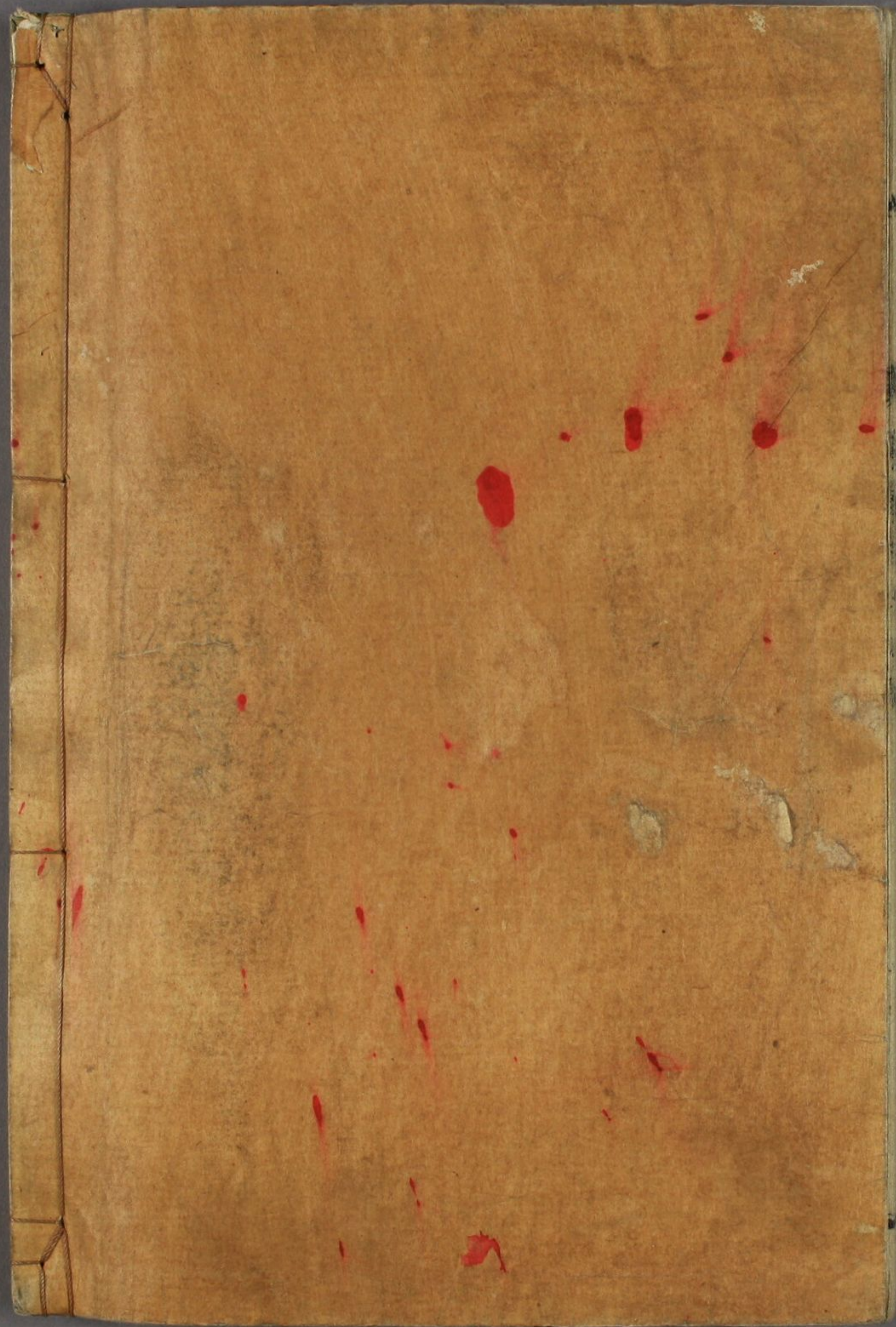
新體詩鈔

初編

外山正一
矢部良吉
井上哲次郎
撰全







外山正一
矢田部良吉
井上哲次郎
全撰

初編

新體詩鈔 全

明治十七年十二月再版

新體詩抄序

程子曰。古人之詩。如今之歌曲。雖閭里童稚。皆習聞之。而知其說。故能興起。今雖老師宿儒。尚不能曉其義。況學者乎。是不得興於詩也。余讀此文。慨然而歎曰。今之歌曲。如古人之詩。而今人不知之。賤今之歌曲。而尚古人之詩。嗚呼。亦惑矣。何不取今之歌曲乎。後讀傳記。見原益軒齋謂曰。我邦只可曰和歌。言其志。述其情。不要作拙詩。以招謔癡。

符之韻。余又曰。誠如益軒氏所言也。我邦之人。可
學和歌。不可學詩。詩雖今人之詩。而比諸和歌。則
爲難解矣。何不學和歌乎。後入大學。學泰西之詩。
其短者。雖似我短歌。而其長者。至幾十卷。非我長
歌之所能企及也。且夫泰西之詩。隨世而變。故今
之詩。用今語。用至到精緻。使人翫讀不倦。於是乎
又曰。古之和歌。不足取也。何不作新體之詩乎。既
而又思。是大業也。非學和漢古今之詩歌。決不可

取。乃復學和漢古今之詩歌。咀英嚼華。將已作新
體詩。而未和其成與否也。屬者、山仙士。與尚今
居士陸續作新體詩以示余。余受而讀之。其文雖
交俗語。而平乎坦坦。易讀易解。乃歎曰。齊是哉。雖
閭里童稚。於習聞之。何難之有。且作此詩。已發舒
情志。則不亦勝於作唐詩以招吟癡符之誦乎。乃
與二君屢相往來。改格正調。所作不爲少。因撰其
佳者。名曰新體詩抄。是爲第一編。世之作詩歌者。

其或謂以爲鄙俗乎。雖然。自古新體詩之興。多出
于偶然。而不必係百方鍊磨之勞也。果然則此書
雖鄙俗。安知其不爲新體詩之始也。

明治十五年五月七日

巽軒居士井上哲次郎撰

新體詩抄序

人常ニ善惡是非ノ差別ヲナスト雖モ一定不易ノ理アリテ
然スルニ非ザルガ如シ其善ト爲シ惡ト爲ス所ハ其父祖ヨ
リ遺傳セル心性ト其處ル所ノ社會ヨリ受ケタル教育トニ
由テ稍規準トナス可キモノヲ心中ニ生シ之ニ依テ判別ス
ルノミ儒道ノ專ラ行ハル、邦ニ於テハ孔子ノ言フ所ヲ是
ナリトシ「モルモン」教ノ專ラ行ハル、地ニ於テハスミス氏
ノ云フ處ヲ眞ナリトス方今歐洲人ノ信仰スル耶蘇教ハ嘗
テ猶大國ノ邪教ナリキ方今我國人ノ信仰スル佛教ハ嘗テ
印度ヨリ放逐セラレシモノナリ方今世ニ行ハル、光線波

動ノ説萬物化醇ノ論ノ如キハ昔人ノ非ト為シ、所ナシ明
治ノ時代トナリテ某氏ノ為メニ初メテ楠公内藏之助ノ忠
義ハ權助ノ忠義ニ比ス可キヲ知リ某氏ノ為メニ初メテ壓
制ハ自由ノ因ナルヲ知レリ世界ノ廣キ開化ノ種々ナル仍
ホ人肉ヲ啖ヒ老者ヲ生ノマ、埋メテ是ト為スノ國ナシト
モ云フ可カラズ國ヲ異ニシ時ヲ異ニシ教育ヲ異ニシレ觀念
ノ聯合ヲ異ニスルモノトハ與ニ善惡是非ヲ語ル可カラズ
故ニ歌テ曰ク

世ノ中ハオノガ心ノスガタナリ

善キモ惡キモ外ニナクシテ

斯クハ述ルモノ、敢テ世道ノ衰頽ヲ憂ヒテ之ヲ挽回セン
トスルガ如キ大事ヲ圖ルニ非ズ唯頃者同志一二名ト相謀
リ我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルト少ナキヲ
嘆シ西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出セリ但シ
今成ル所ハ西詩ノ譯ニ係ルモノ多シ乃チ其數首ヲ集メテ
一冊トナシ世ニ公ニス是レ我輩ノ稍心ニ嘉シトスル所ナ
レ氏安ゾ知ラン世人ハ之ヲ奇怪千萬野鄙至極ノモノトナ
シテ唾棄セント然レ上ニ云フ如ク是非善惡ハ一定
ノ理ナク時代ノ新古開化ノ先後各人ノ信ズル所ニ隨テ異
ナルモノナレバ我輩ノ詩モ亦今世ノ人ニ容レラレザルモ

安ゾ知ラン後世ホームルシェーキスピールトマデニコソ至
ラザレ或ハ大家ノ出ルアリテ其新流義ナルヲ善トシテ一
層ノ工夫ヲ加ヘ更ニ人心ヲ感ゼシメ鬼神ヲ泣カシムルノ
詩ヲ賦シ出スニ至ラザランコト此編ヲ讀ム者須ク此ヲ諒
シテ我輩ガ素志ノ苟且ナラザルヲ曉ルベシ敢テ卑見ヲ録
シテ以テ序言ニ代フト云爾

明治十五年四月

尚今居士矢田部良吉識

新體詩抄序

唐の横町の毛唐人か云ふもの大凡物不得其平則
鳴艸木之各聲風撓之鳴水之無聲風蕩之鳴
云々人々於言々然不得已而後言其言也若思
其哭也若懷凡出乎口而為聲者其皆有弗平者乎
と我邦のみを長歌たの三十一文字たの川柳たの支
那流の詩たのと様々此鳴方ありて月を見てハ鳴
り雪を見てハ鳴り花を見てハ鳴り別品を見て
ハ鳴り矢鱈鳴りちとすとも十分の鳴り盡
まると能はざる何んとあれ古來長歌を以て鳴れ

るものもさういふにらねども、こゝに最と稱するは、ことごと
 して殊み近世のさまりて、八長歌ハ全く地を拂つる有
 様な事、物に感動せられたる時の鳴方は三十一文
 字也川柳也簡短なる唐詩と出掛け實に手輕なる鳴
 方なればなり蓋し其鳴方の斯く簡短なるを以て見れば
 其内にもある思想とても又極めて簡短なるものたるに疑
 なく、甚た是禮なる申分ぬ知らぬもの二千一文字
 也川柳の如き鳴方にて能く鳴り盡すことの出来
 る思想ハ線香烟花の流星位の思ひ過さざりて少
 く連續したる思想内もありて鳴らんとはさるべき

固より斯く簡短なる鳴方にて満足するものな
 らず又唐風の詩を作り稍々長く鳴るもの近末
 世間少くせられしを抑も詩と云ふものハ其意味
 を固より大切なれども其音調の良否を又甚だ大切
 の夫れ愛劇者流の漢學者が唐詩を化る也固より
 平仄と云ふものあるに其詩たるに通りハ音律も叶ひたる
 ことハ萬々疑ありと雖も芥子坊を以て之を吟鳴ら
 せぬたらんハ果して心地よき音調のものあるか將
 破錫を雷本とて叩く如きものあるこの未だ知る
 ことハ蓋し日本人の取つてハ支那流の詩ハ恰も

瘧の字真似若くハ操人形の手踊の如きものあり瘧
 を生れしめて瘧の真似をとり人と生れて人形の真
 似をたすもの又恟々としてけんやそとして我等ハ連続
 したる思想内にある譯をもあつて心地よき音調を
 以て能く鳴らすことの出来るもののみをあつねとも全く
 三十文字也堅くするべき唐詩の出来る悔しき何
 らつと腕組志すれとやまう古来の長歌流新體な
 らくを付けると付けたる矢迄自分免許の真高で
 あるに西詩をも惜げなく譯もからぬ文句にて譯し
 や尚ほ拙さをあつめおせる長文句能く見れハ

新體と名をとる新ふ箇ゆれと

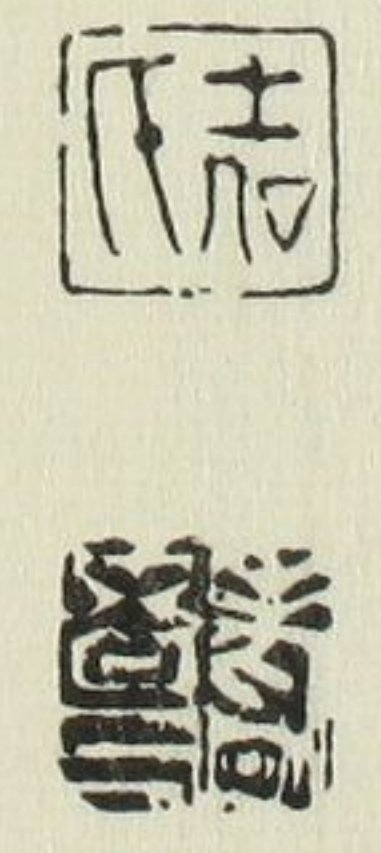
やまう古體の大佛の法螺

法螺と知りつて古を我よりあきらん下心笑ふとこそハ
 云ふつけれ法螺ハ我より始すものみあらぬま
 たりもそのあつてゐるこゝろてハ假令法螺でもあ
 まするし唯と人は異なる人の鳴らんとする時ハ志
 ぬれた雅言や唐國の四面四面の字を以て詩文の
 才を表はして我等ハ組みまゐりてハ新古雅俗の区
 別なく和漢西洋にちやせめて人は分るるを專と
 人ふかかると自分極め易く書くのあつての能見

識高き人たつち可咲しあものと笑ひ笑ひ誇ふ
云ふ慕念ふ出を好ましくなれは多くの人れ其
中一人自分極の我等の羨望を賛成する馬
鹿ありとせよ安んを知らん我等のちんぷん
の寝言とてを遂に今日の唐詩の如く人々の
てはやさるゝことあるを究賢

明治十五年五月、山仙士外山正一撰

柳田泉文



凡例

一均シク是レ志ヲ言フナリ、而シテ支那ニテハ
之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ
歌ト詩トヲ總稱スルノ名アルヲ聞カズ、此書
ニ載スル所ハ、詩ニアラス、歌ニアラス、而シテ
之ヲ詩ト云フハ泰西ノ「ポエトリ」ト云フ語
即チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ、
古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ、
一和歌ノ長キ者ハ、其體或ハ五七、或ハ七五ナリ、
而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ、七五ハ

七五ト雖モ古ノ法則ニ拘ハル者ニアラス、且ツ夫レ此外種々ノ新體ヲ求メント欲ス、故ニ之ヲ新體ト稱スルナリ、

一此書中ノ詩歌皆句ト節トヲ分チテ書キタルハ、西洋ノ詩集ノ例ニ倣ヘルナリ、

一詩歌ノ初メニ往々序言ヲ附スルハ嘗テ新聞雜誌ノ類ニ掲ケタル者ニテ、其事頗ル詩學ニ關係アルヲ以テ復タ之ヲ此ニ掲ケ、敢テ其煩ヲ厭ハス、看官幸ニ之ヲ諒セヨ、

明治十五年五月

編者識

目次

ブルウムフィールド氏兵士歸郷の詩(山仙士)	一葉
カムプベル氏英國海軍の詩(尚今居士)	四葉
テニソン氏輕騎隊進撃の詩(山仙士)	六葉
グレイ氏墳上感懷の詩(尚今居士)	九葉
ロングフェルロー氏人生の詩(山仙士)	十六葉
玉の緒の歌(巽軒居士)	十九葉
テニソン氏船將の詩(尚今居士)	二十二葉
抜刀隊の詩(山仙士)	二十五葉
勸學の歌(尚今居士)	二十八葉

チャールズキングスレー氏悲歌(山仙士)	三十葉
鎌倉の大佛小詣で、感あり(尚今居士)	三十三葉
高僧ウルゼーの詩(山仙士)	三十六葉
シヤールドレアン氏春の詩(尚今居士)	三十八葉
社會學の原理小題す(山仙士)	三十九葉
ロングフェルロー氏兒童の詩(尚今居士)	四十三葉
シェーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段(山仙士)	四十五葉
シェークスピア氏ハムレット中の一段(尚今居士)	四十八葉
シェーキスピール氏ハムレット中の一段(山仙士)	五十葉
春夏秋冬の詩(尚今居士)	五十二葉

新體詩抄初編

外山正一
 矢田部良吉 全撰
 井上哲次郎



ブルウムフキールド氏兵士歸郷の詩

、山仙士

涼しき風ふ吹かれは、 ありー昔の我父の
 椅子よもたれてあるさまは 實よ心地克くありよける
 その座を志めー腰掛の 堅く作れる臂掛り

よそぢの昔荒くと	刻みのこせる我名前
猶ありくとみゆるかり	柱よ掛く古時計
元ふかいらぬ其音色	聞きて轟く我胸ふ
満る思は猶切よ	えりさく如く堪がた
忘れんとして忘れず	嗟歎ふ堪へぬ其時ふ
後ふ掛く古畧曆	忽ち寄るそよ風よ
ひらくくと誘われて	上るは是ぞ陣前り
嵐ふ逢ふて翻へる	小幡とふそ見ゆるおれ
一枚は、り又下へ	下りて落るその紙は
數も合せて二十年	故郷をはふれ遠國ふ

暮せる年の數取りぞ	折しも家の入口へ
来たる一羽の知更鳥は	人よ狎れたる鳥おれど
我をつらく不審顔	怖づるが如く且つそ又
はよかむ如く見へよけり	口よ云いねどそのふりの
嗚呼老ひたりや老ひよけり	それふ居らする武士は
昔の友ふあらぬかと	尋ねる様ふ見へりけり
斯く心中ふ彼是と	物を思へる其間
眺ふおぼめつくくと	窓の限ふ織あせる
苔の席を眺むれむ	緑の色 <small>いろ</small> の青くと
其美さあてやのさ	又と類いあらなくふ

是も誰がわが^と稚子の
敷て樂むものありと
思ひい更よいやまさり
年をも日をも打忘れ
わつと計ふ啼きよけり
あゝ我ながら愚まゝと
過き越く方をさまくふ
辱しく又口惜しく
軍の神をのゝ忘れり
可^あ惜勇士の失せぬるは

あゝたゆふべの手をさみよ
推量そればいとゞなほ
胸へそゞろよ塞りて
前後を知らむ立上り
稍時ありて心付き
再び椅子よつくくと
思ひつゝ、けて按ぞれを
意はず髪も逆立ちて
名譽の淵ふ落ち入りて
實よ傷敷き事ぞかゝ

殺傷放火分捕の
今更思ひめくらせむ
我身と守るたりらぞと
我身の罪をさねたる
恨いいとゞいやまされ
二人の影を見ゆるなる
あらくの老と見受けたれ
計らぬめぐり逢ふ坂や
せき来る涙關あへず
嬉し泣きふぞ泣きよける

其有様を熟くと
あら恐ろしくむごたらしく
頼み頼める劍あつ
仇と思へばなほさらふ
聲するかたどらちみれば
此影こそい稚子と
やがて入り来る我父い
我子の顔を一目見て
我を抱きて老いの身の
そが傍ふゝゆる

目元涼しき小女子	腰打屈れ老人
これナンセーと手を取りて	口を合はすもあまる愛
こゝ小居やるのやうくと	イスパニヤより歸國せる
そなたの伯父のチャレぞと	云へば女を近寄りて
志らむの如き指をあげ	いと曇れる老の眼を
そと打弾きぐわんぜあく	笑ふ姿の可愛ゆらし
嗚呼我ながら愚なり	身の上ばかり斯く長く
繰返へきこそ無益かれ	それ小付きても兎小角小
此老卒ぞ幸多き	浮世の中お今いまた
心よ掛る雲もあし	

カムプベル氏英國海軍の詩

尚今居士

イギリス國の海岸を	固く守れる水兵よ
一千年のその間	汝が建つる大旗は
戦争のみよ嵐をも	支へ得たれば此後を
敵を受くともたゆみなく	勇氣の限りひるがへせ
軍烈しくあらむあれ	嵐も強く吹かば吹け
立ちくる海の浪間より	汝が祖先あらはれて
汝を援けたまふべし	蓋し祖先の軍艦の

其甲板かたいてがらの場
大子おとこルソるそンヤブレブレーキキ乃

大海原おほうみの其墓場
死しふ一處いっしょの人志ひとこころのぶ
嵐あらしを強く吹ふるば吹ふけ

四方海よつうみあるブリタニヤ
山やまとたちくる波なみとて毛
慣れて我家わがや小異ちがひあらぞ
船ふねより放はなち轟とどろく
軍烈いくさくあらばあれ

とりでを城しろも用もちいあし
千尋せんじんのそこの淵ふちとて毛
いかづちあせる大砲たいぱうを
波なみをわけつ、進すすみ行く
嵐あらしを強く吹ふるば吹ふけ

國くにの光ひかりとたてし旗はた
危難あやふしも都みやこて解とけ去さりて
其時そのとき汝おまえついのもの、
歌うたふ唱となひて悦よろこびて
烈いそく軍いくさをみし時とき

益えき、光ひかりり輝かがきて
太平たいへいの日ひふ毛もどるらん
いさほし譽うらやまて諸人しよじんが
安樂あんらく限りあゝるらん
強つよき嵐あらしのやみし時とき

左の詩ハ一千八百五十四年英佛の西國土耳其
と援けて魯西亞と兵端を開き遂に高名あるク
ライミヤの戦争となり此間數多の合戦此處彼
處に在りたる中最有名なるものハ同年六月廿
五日バラクラバの戦争にて英國の輕騎隊六百
騎が目よ餘る敵の大軍中へ乗り込み古今無雙
の手柄を顯はしたれども惜以哉衆寡素より敵
に難く其大概に討死し或に擒ふせられ無難に
歸陣したる者甚僅よて有きと當時英國に有名
ある詩人テニソン氏が其進撃の有様を吟味し

たる者ふして何國人に限らざり苟も英語を解に
るもの此詩を暗誦せざるなりといふ

山仙士

テニソン氏輕騎隊進撃ノ詩

其一

一里半なり一里半 並ひて進む一里半
死地に乗り入る六百騎 將に掛れの令下は
士卒たる身の身を以て 譯を糾きの分あらむ
答をわねを分ならず 此れ命これに從ひて
死ぬるの外にあらざらん 死地に乗り入る六百騎

其二

右を望めば大筒ぞ
共よ打出に砲聲の
響の如く凄まじく
猛り立てぞ進むる
勇んで乗り入る六百騎

前も左りも又筒ぞ
天ふ轟くいつちの
弾丸雨飛の間ふを
死地こそ入れ鱈の口

其三

抜けば玉ちるやいばを
きらくくくと輝けり
大砲方をふで切りは

皆をろ共ふ振あげて
敵陣近く乗り掛けて
最と目冷き働きぞ

烟の中ふ飛込みて
太刀の早業見ごとなり
遂ふさふ事あらば
馬の頭ぞ立直す
残るいとわげりあり

烈しく陣を破るあり
敵の軍勢たぢくと
むらくくつとむらくづれ
以前よ進みし六百騎

其四

右を望めば大筒ぞ
共ふ打出す砲聲の
弾丸雨飛の其中よ
死地より出て、乗り歸へ

左りも後を又筒ぞ
天ふ轟くいつちぞ
從横むじん切り靡く
鱈の口より脱れ出て

歸るい元の一里半 六百人の其中で
残るいいとわづらあり

其五

あゝ勇まきむのふの よふ香しき其譽
手柄の永く傳へなん 今のとさあご生立ちて
とる年あまた重りて 腰の梓の弓とあり
頭ふ霜を戴きて 孫ひこやど多き時
六百人の豪傑が 敵の陣へと乗り入れる
そのふる事を語りあは 末代までも名の朽ちじ

我國ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚ダ少
ナシ蓋シ其趣向ノ我詩歌ト同ジカラザルカ為
メナルベシ又適翻譯スル人アルモ之ヲ支那流
ノ詩ニ模擬スルガ故ニ初學ノ輩ハ解スルコト
能ハス余之ヲ慨スル久シ以為ク西洋人ハ其學
術極メテ巧ニシテ精粗到ラザル所ナシ其詩歌
ニ於テモ亦之ト均ク能ク景色ヲ模寫シ人情ヲ
穿テ讚賞ス可キモノ多シ且ツ其句法萬種ニシ
テ韻ヲ踏ムモノアリ踏マザルモノアリ緩漫ナ
ルモノアリ疾急ナルモノアリ其語勢ノ變化殆

ド捉摸ス可ラズ而シテ其言語ハ皆ナ平常用フ
ル所ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借ラズ又
千年モ前ニ用ヒシ古語ヲ援カズ故ニ三尺ノ童
子ト雖モ苟クモ其國語ヲ知ルモノハ詩歌ヲ解
スルヲ得ベシ加之西洋人ハ短キ詩歌ヲ好マザ
ルニハ非レドモ亦長篇ヲ尚ビ尋常ノ日本書ノ
如キ薄キ冊子ヲ以テスレバ一篇ニシテ十餘冊
ニモ上ルモノ少ナシトセズ頃口學友、山仙士
ト相謀リ吾人日常ノ語ヲ用ヒ少シク取捨シテ
試ニ西詩ヲ譯出セリ余素ヨリ詞藻ニ乏シト雖

モ既ニ譯レ得ル所數篇ニ至ルヲ以テ今其一ヲ
舉ゲテ江湖諸彦ノ高覽ニ供ス幸ニ其詞藻ノ野
鄙ナルヲ笑フナカレ

尚今居士識

グレイ氏墳上感懷の詩

山々ろほみいりあひの 鐘のありつゝ、野の牛の
徐ふ歩み歸り行く 耕へる人もうちつゝあれ
やうやく去りて余ひとり たそがれ時ふ残りけり

四方を望む夕暮の 景色はいいとゞ物寂し

唯この時ふ聞ゆるい 飛び来る蟲の羽の音
遠き牧場のねやふつく 羊の鈴の鳴る響

猶其外ふ常春藤くげき 塔よやどれるふくろふの
近よる人をいれりし見て 我巢ふ窟をかほものど
訴へんとや月ふ鳴く いとあわれよも聲はあり

かくこふい榆又まよ あら、ぎの木ぞ生茂る
其下かげふらづだうく 苔むす土の覆ひたる
壙あなよ埋まれこの村の 古人長く打眠る

のきの燕もふいとりも 木魂ふ響く洵笛も
あさばらけよぞかりぬれば かまびすしくいありつれど
冥土の人の眠をい 覺はことこそなうりけれ

死ふたる人のはかあさよ 身と暖むる爐火も
妻のよなべも誰が為めぞ 爰らわらべがのたまどふ
爺の歸りをよろこびて 小膝よまがるまともあし

曾てこの世ふ居し時い 麥も小麥も其鎌り

山もはたけも其くそふ	手荒き馬も其むちよ
繁れる森も其斧に	まのせて君が儘ありき
功名とても浮雲の	過るが如きものふれむ
この古人の世の益と	はねとりまらも不運をも
わびしき妻子の暮しとも	笑ふべきふいあらばうし
富貴門閥のみあらば	みめうつくしきととめこも
浮世の榮利多けれど	いつの無常の風ふらば
草葉の露もれろかあり	黄泉 <small>よみ</small> 入るの外ぞあま

苔ふりもれし古人の	墓場の上ふ寺をたて
あたりまはゆき屋の内ふ	頌歌の聲よ合はる
樂器の音を聞ぎとも	身の不徳とを思ひそよ
ひつぎ肖像美を盡し	人の尊敬多くとも
ひとたび絶えし玉の緒を	つなぎとむべき術のな
へつらふ人のほめ言も	長き眠の覺はま
考へみれば廢れたる	此古墳の古人を

世よきぐれたる量ありて 國を治むる徳を具し
詩文の才も多けれど あらはれざして失せける歎

學びの海に廣けれど わたる船路を知らざれば
心の性さがに賢きも 身の賤しくて貧ふれを
世のはまれを聞かざして 空しく鄙ふ終りけり

深き水底求むれを 輝く珠も有るぞか
高き峯をみやこ尋ねれば かどる水草の多けれど
千代の八千代の昔より 人ふ知られで過ぎふけり

實まことふ此墓に埋もれて 業わざのかともハムゲン
詩の拙くもミルトンミルトンふ 國くにふ軍を擧むとを
クロムエルクロムエルふも比ふべき 人のかねやあるあらん

議院の議士を服さしめ 人のたどしも外まがに見る
國の安危を身みふ委ね 高き譽望を民たみふ得る
此等のわざいおしあべて 古人何ぞあづからん

惠みのひろく及ばねど 又常々のふるまひふ

不徳もいと少ふしや
民をかやめて利をのみ
人を殺して王とあり
夢よもみまどさることば

まことをかくばそら言ふ
恥ると忍ぶ心の苦

且つ巧ある詩文もて
富貴ふ媚る世のあらひ
是の都の弊おれど
未だ此地よ及ばさむ

此處よ生れて此處よ死ふ
都の春を知らざれば

其身の淨き蓮の花
思ひの清める秋の月
實ふ厭ふべき世の塵の
心ふ染みしことぞあま

されど收めしあまがらの
こるしの爲と側近く
建し石碑の今もあり
文の拙く彫りざまの
醜しとてもたび人の
憐を争で惹おざらん

碑面ふえれる名よ年齢ふ
記し、文字の拙くも
記念の功の有ぞか
又有がたき經文の
文句を引きてえりたるを
人ふ無常を論は為め

蓋し此世ふ生れ來て
程ふく死るその時よ

別れの惜しきこともなく
心の外ふ打捨て、
浮世の花の榮をを
去り行く人のあうるべ

眼の光り止むときは
たましい體を去るときに
たとい焼くとも埋むとも
人の思ひの消えいせど

偕又此ふ古人の
いつか歸らぬ旅ふたち
如何せしやと思ひやり
いれい書けど余とても
過ぎ行く後の世の人の
たづぬることもあるならん

こからん時の此さとの
老人斯くぞ曰ふならん
昇る旭を見ればやとて
頭ふ霜を重ねたる
我儕の彼れが朝早く
岡ふ登るを常よ見き

又彼處ある川ばたの
わだかまりたる根の側り
流る、水よ打臨み
杖伸び垂れし山毛櫨の木
身を横たへて晝いこひ
其常あきをかこちけん

又彼處ある常葉木の
木立の下ふさまよひて

かしら傾けうでを組み 知る人あさの歎あしき
とっかぬ戀の口惜しさ 世のうき杯をかこちけん

さるふひと日ハ彼の人を 慣れし岡ふも樹陰ふも
絶て見ることをあかりけり 其翌朝ふありぬれど
野ふも森よも川邊ふも 身をば現はすことぞあき

又其次の朝ぼらけ 屍送る歌きけ ば
まさしく彼の爲めありき 君ハ字を知る人なれば
彼の山櫃まにびの陰ふある 碑文を讀みて識りたまへ

碑文

土ふ枕しこの下ふ 身をかくしたる若人は
富貴名利もまだ知らぬ 學びの道も暗けれど
あはれ此世を打捨て あの世の人とありみけり

仁惠深き人あれば 天も憫み報ひけり
憂き人見れば涙ぐむ (外よ詮すべあき故よ)
ひとりの友のありしとよ (外よ望みはああるらん)

これより外ふ此人の 善し悪し共ふあ不深く
尋るとても詮ひあし たましひ既よ天よ歸し
後の望みといだきつゝ 神ふまぢあく侍るあり

ロングフェルロー氏人生の詩

山仙士

そも靈魂の眠るのい 死ぬといふへきものぞか
人の一生夢ありと あいれあふしでうたふあよ
眠らふや夢い見ぬものぞ 此世の事い何事も
夢とおもへどさふあらぢ

人の一生夢あらば 最とたしあふる事ぞか
人の終い墓なくも 墓ふうづまるものあらぢ
土より来り又土ふ 歸ると云ふい肉體ぞ

そりや靈魂の事あらざ

此世小在りて樂むも
世よある趣意よあらざらん
日毎くよ怠らざ
功を立てねばあらぬぞよ

又苦しむを固と人の
生るの役小立つ為ぞ
今日の今日丈け一日の

光陰實り箭の如く
心の如何小猛く共
送葬大鼓打つ胸の

藝道最とも易からぞ
墓ふく進む葬禮の
音止めされたる大鼓の音

最ともあわれよひびくらん

此世の中の戦争ぞ
人小生れた甲斐もなく
あゆむ羊や牛たるふ
功名手柄ふまべきぞ

其戦争の中小居て
人小使われ追をれは
人小劣らむ憤發し

如何小樂しくかもふ共
如何よろれくありつとも
働くべきに現在ぞ

未來のあてふまべあらば
過去のむろこ小過し事
其働を見る者の

胸の心と天の神

豪傑輩の一生を
生きて甲斐なきものならば
稀なる譽得るならば
永く傳へて残るらん

熟ら思ひめぐらせば
人ふ勝れし手柄して
名は香しく後の世に

其香しき名を聞あは
艱苦辛苦の浪風ふ
助け船さへあらぬ身も

社會の海に乗り出して
吹き廻りされて破船して
氣を取り直し憤發し

功名遂ぐる者あらん

されば人々怠たるあ
運命如何よつたなきを
たゆまざ止まば自若とし
勤め働くことをせよ

暫時も猶豫をるあかれ
心を落せことあわれ
功名手柄あしは、を

余蚤ニ新體ノ詩ヲ作ラント欲セシト雖モ、其容
 易ノ業ナラザルヲ慮リ、先ツ和漢古今ノ詩歌文
 章ヲ學ビ、ソレヨリ漸次ニ新體ノ詩ヲ作ルノ路
 ヲ為サントシケルニ、一日尚今居士ハムレット
 ノ譯詩ヲ示サル、其文俗語ヲ交フト雖モ、反リテ
 古歌ヤ漢詩ノ解シガタキニ勝ル、因リテ余之ヲ
 歎賞シテ學藝雜誌第六號ニ載ス、次イテ、山仙
 士モ亦ハムレット并ニカーヂナル、ウルシー等
 ノ作アリ、是ニ於テ余思フニ古今ヲ問ハズ、東西
 ヲ論セス、凡ソ新體ノ詩ノ流行スルハ、大抵偶然

ニ出ヅル者ニテ、必ズシモ百方鍊磨ノ勞ヲ俟タ
 サルナリ、サレバ尚今居士、山仙士ノ作ル所モ
 新體ノ詩ノ始メナルヤモ知ルベカラズ、乃チ自
 カラロングフェロー氏ノ玉の緒の歌ヲ譯シ、二
 君ヲシテ新體ノ詩ヲ創造スルノ功ヲ專ラニセ
 シメザラント欲ス余ノ作ル所略ニ君ニ同ジ、但
 ニ君ハ韻ヲ踏マス余ハ試ニ韻ヲ踏ム、是レ其差
 ナリ、或ル人余ガ譯詩ヲ見テ、大ニ笑フ、蓋シ或ル
 人ノ如キハ文學ノ盛衰興廢スル所以ヲ知ラザ
 ル者ニテ、深ク尤ムルニ足ラズ、夫レ明治ノ歌ハ

明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新體ノ詩ノ作ル所以ナリ、若シ夫レ押韻ノ法用語ノ格等ハ、次第ニ改良スベキノミ、一時ニ為スベカラズ、看官幸ニ之ヲ諒察セヨ、

巽軒居士識

玉の緒の歌(一名人生の歌)

眠むる心の死ぬるあり 見ゆる形のおほろなり
あすをも知らぬ我命 あいれはのあき夢をかこし
など、あいれふいふの悪く

我命こそまことあれ 我命こそたしかあれ
墓の終りの場所あらむ 人の塵ふて又散ると
いふのからだのうへのこと

人の願の喜か 人の願の悲あ
人の願のこれあらむ 唯怠たらずはたらきて
今日よりまさる明日とまで

業の久しく時の馳す 強き胸たも亦たえむ

鼓の如く撃ち続け 一日くまなくある
死出の旅をぞいやする

争ひ多き世の中ふ 此身を寄せて先鞭ふ
ありてまきく進むべく 言ふき啞とある勿れ
牽かる、牛とある勿れ

如何ふ未来の樂しきも 如何ふ空しき過去あるも
共ふ之を捨ておきて われを忘れず神を知り
はたらくべきの今日をうり

すぐれたる人世ふ多し われとても人相同ト
勉め勵まば斯くあらん ゆめ怠らば勉めあは
長く残さん此名をぞ

海より荒き世の中ふ 舟失ひて波の間ふ
獨漂ふ我友は 我名を聞きて勇まらん
我名を聞きて進まらん

さすれば人の氣を張りて 事業ばかりふ心して

如何ふる運も事とせむ
高きふ至れ馳せゆけよ
樂あるぞはたらけよ

テニソン氏船將の詩(英國海軍の古譚)

尚今居士

暴威を以て下を馭す	人ハ此世の鬼ふるぞ
天地も容れぬ罪あるよ	其過ちの深きこと
阿鼻の地獄も及ばじあ	若しや今しも壓制を
嗜まんもの、あるあらば	わが此歌をよく聽て
其身を深くいましめよ	曾て勇々 ^と き ^も 武士の
將たる船の乗組ハ	自由の空氣吸ひ ^も かれし
英吉利國の人なれむ	勇のみあらば信あれど
其船將の壓抑と	深く怨みて措 ^と むとよ

將が性質猛くして	慈愛の心露ほども
無きのみあらば針不どの	罪も嚴しく糾し問ひ
免せことあし斯てせよ	將が暴威いひやつのり
船人どもの心中よ	燃る怒のそのほの不
消るひまあくまうくよ	とりさへあらば燃え出で、
人とも身とも、ろ共よ	焼うんとすあり然れども
船將常よ望むらく	いつか勲功あらはして
わが船の名を轟かす	古今未曾有の英雄と
千萬人よ呼ばれんと	一途よこ、ろ傾けて
湊よ過り岡よ浴ひ	岬を廻り島を歴て

北よ南よ何處となく	残るくまあくたゞ渡り
大海原の真中よて	北をはるかよ眺むれば
帆を打揚げて来る船は	是ぞ正しく佛蘭西の
軍の船よまざれなき	わが船將の面絶は
喜び外よあらはれて	言葉も心といそがはし
船人ども、銘々の	心ふたくみありければ
眼の中よかのづから	喜ぶ色の見えたりし
將の聲色高らうよ	をのども船を追ふべし
一と號令を下りま、	風よまかせて我船を
敵よまぢかく進みゆく	大、よ乗組一同は

常小怨みし大將を
大砲はなつものいふ
實ふいかつちの落るごと
天地も破裂するばかり
帆架もわれてこそ微塵
銃丸繁くふりきたり
甲板のみか帆柱を
生きとし生けるもの共は
もの言ふこともかゝねば
見合に姿凄まじく

みらみて腕を又きて
されど敵の大砲は
轟きわたるおそろしさ
横木も折れて波も落ち
甲板裂けて容なく
雨うあられお怖ろし
人の脳やら血汐やら
右も左もうち倒れ
倒れしまゝ、小顔と顔
血汐の中よ玉の緒の

絶えんとしつ、船將を
嘲り笑ふ氣色あり
頼みし人もことごとく
われを賣りしぞ口惜き
辱と恚のせりあひひ
齒りみをかして叫べども
かばねの上よ倒れけり
實は怖るべし惡むへし
失ひしこそはかあけれ
經ぬといへど船將や

見うへる眼おのづから
將の功名立てんとて
我を嘲りふらみつゝ
心のうちい堪へられぬ
顔色青く赤くあり
終小痛手の痲おひて
嗚呼壓制よ嗚呼暴威
數多の勇士いたづらふ
其のち多く年月を
船人どもの志うばねを

水層ミヅとありて海底小 今も沈みて残るらん
さりとも見えぬ波の上り 浮べる 鷗ウ二 三 四

西洋ふての戦の時慷慨激烈なる歌を謡ひて士
氣を勵ませることあり即ち佛人の革命の時「マル
セイエーズ」と云へる最と激烈なる歌を謡ひて
進撃し普佛戦争の時普人の「ウオツキメン、オニ
ゼ、ライン」と云へる歌を謡ひて愛國心を勵ませ
し如き皆此類あり左の抜刀隊の詩に即ち此例
ふ倣ひたるものなり

抜刀隊

山仙士

我の官軍我敵の 天地容れざる朝敵ぞ

敵の大將たる者は	古今無雙の英雄で
之よ從ふ兵 <small>ついで</small> の	共小慄悍決死の士
鬼神ふ恥ぬ勇あるも	天の許さぬ叛逆を
起し、者い昔より	榮えし例あらざるぞ
敵の亡ぶる夫迄い	進めや進め諸共小
玉ちる劔抜き連れて	死ぬる覺悟で進むべし
皇國の風と武士の	其身と護る靈の
維新このかた廢れたる	日本刀の今更り
又世ふ出づる身の譽	敵も身方も諸共小

刃の下ふ死ぬべきぞ	大和魂ある者の
死ぬべき時い今あるぞ	人ふ後れて恥かくふ
敵の亡ぶる夫迄を	進めや進め諸共り
玉ちる劔抜き連れて	死ぬる覺悟で進むべし
前を望めば劔あり	右も左りも皆劔
劔の山ふ登らんを	未來の事と聞きつるに
此世よ於てまのあたり	劔の山ふ登るのを
我身のおせる罪業を	滅す為よあらばして
賊を征伐するが為	劔の山もあんのその

敵の亡ぶる夫迄の
進めや進め諸共ふ
玉ちる劔抜き連れて
死ぬる覺悟で進むべし

劔の光ひらめく
雲間ふ見ゆる稻妻か
四方ふ打出す砲聲は
天子轟く雷か

敵の又ふ伏せ者や
丸ふ碎けて玉の緒の
絶えて墓なく失する身の
屍の積みみて山をか

其血の流れて川をかす
死地よ入るのも君が為
敵の亡ぶる夫迄を
進めや進め諸共ふ

玉ちる劔抜き連れて
死ぬる覺悟で進むべし

彈丸雨飛の間ふも
ニツなき身を惜まをふ
進む我身の野嵐ふ
吹かれて消ゆる白露の

墓なき最後とぐるとも
忠義の為ふ死ぬる身の
死て甲斐あるものあらば
死ぬるも更ふ怨ふ

我と思へん人たちの
一歩も後へ引くふかれ
敵の亡ぶる夫迄の
進めや進め諸共ふ

玉ちる劔抜き連れて
死ぬる覺悟で進むべし

我今茲ふ死人身の
君の為かり國の為

捨つべきものの命あり	假令ひ屍の朽ちぬとを
忠義の為小捨る身の	名の芳しく後の世小
永く傳へて残るらん	武士と生れた甲斐もあ
義もあき犬と云ひるま	卑怯者とあそられそ
敵の亡ぶる夫迄の	進めや進め諸共小
玉ちる劔抜き連れて	死ぬる覺悟で進むべ

勸學の歌

尚今居士

昔一唐土の朱文公	よ小博學の大人あがら
わう學問をすゝめんと	少年易老の詩を作り
一生涯の春の夜の	夢の如くと嘆きけり
國の東西世の古今	人の高卑を問ひぞして
學の道小就くものは	いり小才能ありとても
同一多少の感慨を	起さぬことのあるべくや

春の初花秋の月 夏のみどり葉冬の雪
渾て此世の物事ふ 心をとむる時あらば
わが學藝を省みて 過る月日を思ふべし

池のみぎいの春草の みどかき夢も覺ぬまふ
軒端ふ茂るきりの葉を 吹く秋風ふさそをれて
此年も半ば過ぬるを ふみ讀む人へしらむやい

年の月日をも長けれど 難波入江の村あとの
ひとよの如く思はれて わが身の上のはづろさ

螢や雪の光りふて ふみの讀めども業あらば

昔の人の學問の 唯一すぢの道おれど
おほ賢人の嘆きあり 今の學術多端ふて
枝ふ小枝よ末葉まで いちで凡夫の能すべき

さい云ふもの、諺ふ 山のはとめの一塊土
海のはとめいひと一づく いかふ急げど詮いおし
心をこめていつまでも 怠らぬこそよかりけれ

たとい多くよわたらぬも 唯一藝を修めあむ
身の為とある多からん 蜘蛛ふ藝あり網をはり
蜂ふ能あり蜜つくる 何とて蟲よ及ばざる

勉め勉めよたゆみなく 進み進めよよどみなく
難き事とて厭ふあよ 學の海ふ舟路あり
教の山ふ志をりあり 丈夫何りも怯るべき

チャールズ、キングスレー氏悲歌

山仙士

無常を告ぐる入相の 鐘の音をるたそがれふ
三人の漁夫の帆を上げて 入る日を指して西の海に
走らば船を進めども 妻子の為ふ引かさる
心の中は皆同ト 父の出船を眺めつゝ
おきふ向ひていめる 童子の外ふ餘念なく
まうけの薄く子澤山 雨の降る日も風の夜も
洲ふ打掛くる浪音の 最とまきまとき其時も
かせがふやあらぬ男の身 袖のひぬの女子の身

三人の漁夫の妻三人
鐘も不のかふ聞ゆれむ
火を挑んと立寄りて
窓の戸開けて眺むれば
空打過ぐるむら雲の
暴風の如何ふ吹けばとて
洲ふ打掛くる浪音の
あせがよやならぬ男の身

日も西山ふ入相の
共ふ籠りし燈臺の
つまゆる心の夫思ひ
驟雨やら暴風やら
色黒くと物まご
水かさの如何よ増せばとて
如何程すごく聞けばとて
袖のひぬのを女子の身

朝日かやく砂磯ふ
残るの三つの屍ぞ
歸らぬ旅ふ門出して
髪振り亂し取まがり
目もあてられぬ風情まり
袖のひぬの女子の身
一日も早く樂をせん
寄せ来る浪のくだけた

潮引き去りて其跡ふ
三人の漁夫の妻三人
歸らぬ夫のふきがらよ
消る計ふ啼き入て
かせがよやならぬ男の身
一日も早く世を去れば
屍の跡の砂磯ふ
鳴りたきや鳴れよ急、儘よ

西洋諸邦ハ勿論凡ソ地球上ノ人民其平常用フ
ル所ノ言語ヲ以テ詩歌ヲ作ルヤ皆心ニ感スル
所ヲ直ニ表ハスニアラザルナシ我日本ニ於テ
ハ往古ハ此ノ如クナリト雖モ方今ノ學者ハ詩
ヲ賦スレハ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ援キ
平常ノ言語ハ鄙ト為シ俗ト稱シテ之ヲ採ラズ
是レ豈謬見ト為サルヲ得ンヤ
夫レ我邦人ノ漢學ヲ修ムルヤ殆ト皆ナ所謂變
則ナルモノニシテ漢土ノ本音ヲ以テ其文ヲ讀
下スルモノ甚少ナシ然シテ韻書作例等ニ因テ

平仄韻字ヲ學知スルモ之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ
當テハ既ニ本音ヲ發スルニ非ザレバ到底室内
ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ隔靴ノ憾ナキ能
ハズ何トナレバ凡ソ詩歌ハ意義ノ優美奇巧ナ
ルハ素ヨリ望ム所ナレトモ音調ノ宜シキヲ得ル
ト亦極メテ肝要ナレバナリ而シテ音調ナルモ
ノハ自國ノ語又ハ他國ノ語ナレバ其音聲ヲ曉
熟スルニ非ザレバ其真趣ヲ翫味スル能ハザル
ヤ明ケシタトヘバ變則流ノ洋學書生ガ辭書ニ
據リ作例ニ從テ音聲ノ強弱ヲ學ビ詩ヲ賦スガ

如シ誰カ其迂ヲ笑ハザラン又古言雅言ヲ以テ
長歌短歌ヲ作り並フルモ吾人常ニ用ヒザル所
ナレバ稍外國語ニ類スルガ故ニ之ヲ以テ精密
ニ我衷情ヲ摠ベ我思想ヲ揆スコト或ハ難カラ
ン
果シテ然ラバ余以為ク宜ク平常ノ語ヲ少シク
折衷シ以テ稍新體ノ詩歌ヲ作り充分ニ吾人ノ
心ニ感スル所ヲ吐露スベキナリ然レ氏之ヲ言
フモ為サレバ人或ハ目シテ妄誕漫言ノ徒ト
為サン故ニ余謏劣ヲ顧ズ頃者試ニ西洋ノ詩數

首ヲ譯シ既ニ其一ニヲ新聞雜誌ニ載セシトア
リ今復此新紙ノ餘白ヲ借テ拙作ニ首ヲ掲ゲ江
湖諸彦ノ一粲ニ供ス其一ハ自作ニ係リ但シ始
ノ一節ハ大佛財法日課勸進之序ヲ取捨シテ作
レルナリ其一ハ西詩ノ譯ニ係ル余素ヨリ文事
ニ疏ク詞藻ニ精シカラス江湖諸彦ノ幸ニ我微
意ヲ諒察アラシムヲ乞フ

尚今居士識

鎌倉の大佛小詣で、感あり

今をさることかぞふれを 六百年の其むか

建長のころ鎌倉ふ
總清銅の大佛の
相好いとゞ圓滿し
何れの地ふも比類ふ
由井のつあみの難より
紫磨金仙も雨ふ濡れ
殆ど此よ四百年
余もこのまろ鎌倉の
杖を引きは、大佛ふ

稲多野局が建られし
御身のたけい五丈ふて
見者無厭の尊容は
さるよ明應四年とや
大殿破壊の其後を
風ふ暴されたまふこと
こいおれ人ふ聞くとこ
古跡尋ねてをちちと
詣で、心たちつけて

しかと尊顔見上れを
淨き如来の御心は
涅槃てふ語の思はれて
しむしの間胸の雲
真如の月の圓かある
見たるが如き心地せり
夫れ物事のふりたちは
昔し羅馬の帝國の
起りしものふあらまうし

はちすの花もかよびあき
外ふ見はれ何となく
凡夫不覺の余とても
霧れて無明の夢の醒め
影を見たるふあらねども
頼ふとのふことぞあき
シーザルひとり智を奮ひ
徳川氏の繁昌の

家康ひとり徳ありて 成りしものとあ思ひそよ
時勢人情やうやくふ 運びて此に至りてき
鎌倉山の大佛も 浮屠氏の教へ渡り来て
千百年を過ぎし後 人の信仰厚くあり
鑄もの、術も具りて 初めてありしものまらん

稲多野夫人の時代よ 此大佛ふ打向ひ
精神こめて手を合せ 天下太平安穩と
わが後生とを祈りしも 今の明治の聖代ふ
生れし人の然らせむ 佛の面を打眺め

昔の事を思ひやり 其鑄江の巧みある
業を不むるの外いふ かねばある時勢かな
秋の空ふも劣るまど

昔の人の是といひし 事も今での非とぞある
今日の真いあはれの偽 あはれの教いあさつゝの
非理邪道とやあるならん 天地萬物一定の
規律ふ由りて進化すと 學者い謂へど是を之れ
駭と心ふ認めたる 人の果してありららん

嗚呼盛んある大佛よ 六百年もたつた川
 からくれお力のもみぢ葉と 流る、水を年々ふ
 人の譽むるふ異ならず 尊體此處に在まに間は
 如何小時勢の變るとも 年々人の尋ね來て
 歎賞せざることおけん

此篇ハ高僧ウルゼー初め王の寵愛を得て
 大權を握り威を海内ふ振ひ其富王室ふ劣
 らざるふ至りしも忽ち王の意ふ戻り官職
 を奪ひれ所有を没收せられたる時世運の
 定まりおきを嘆息する所ふして頗る有名
 の作あり

山仙士

おさらばさらむいざさらば 再び會ひぬ暇乞ひ
 榮譽ふ永く別るべし 人の習ひ皆都て
 利運の端の芽出くなむ 八重咲きよふ花盛り

位ふ位重ありて	榮曜榮華を極むれを
愚ふ胸ふ思ふ様	運命強く願かふひ
天ふも登る龍ありと	悦びいさむとろかさよ
冬や、深く置く霜の	情け用捨も荒野原
根までを枯らに霜枯ふ	運極いまりて身の墮落
見るも慙れふ有様は	我が今日の身の上ぞ
永の年月心ふく	名譽の海ふ浮べらひ
浮袋ふてうかくと	遊ぶ童子ふ異ふらば
杖の立たざる淵ふ入り	飽まで強さ我が意地も
ころへをふせば張り裂けて	勞れいてたる精神ふ

忠を盡して年寄れる	其の甲斐もふく今のをや
身の零落よ涙川	水屑とこそい成るべけれ
浮世の虚飾や譽れ程	忌むべき物いあらむかこ
今ふ至りて我が胸ふ	初めて悟る所あり
廣き世界の其内で	王者の機嫌取り取りよ
此世を渡る男ほど	憐むべきい無きぞかこ
願ふ所い其笑顔	恐る、所い其不興
彼と是との氣がねして	憂さ恐怖さの數々の
軍はるより尚ほ多し	女子の機嫌取るふ増は
遂よ零落まる時を	天より落るルシフアなり

再び浮ぶ瀬をあらは

シヤール、ドレアン氏春の詩

尚 今居士

春の景色の、どけさを	いかで好まぬ人あらん
冬の物事さびしきも	春の心のをのづあら
とけて樂み限りあし	雪もみぞれもふる雨を
人をあやまほことぞなき	のどけき春の来る時の
北風強く吹く冬は	野邊の深雪木いつら、
雨もこもりていと寒く	障子ふにまを建廻りし
爐火近く圍居して	ねぐらの鳥ふことあらず

されど嵐も雪も歌む のどけき春の来る時の
曇りがちふる冬の空 日影もうほく晝くらき
されど春ふもふりぬれむ 喜ばしくも雲いれて
光りのどけき天を見る いぶせく降りし雪霜の
跡も残らば消えらせぬ のどけき春の来る時の

社會學の原理を題す

、山仙士

宇宙の事ハ彼此の 別を論ぜば諸共ハ
規律の無きハあらぬかゝ 天ハ懸れる日月や
微かハ見ゆる星とても 動くハ共ニ引力と
云へる力のあるゆゑぞ 其 引力の働ハ
又定まれる法ありて 猥りハ引けるものあらば
且つ天體の歴廻れる 行道とても同トこと
必ば定まりあるものぞ 又 雨 風 や 雷 や
地震の如く亂暴ハ 外面ハ見ゆるものとても

一不定めれる法あり	野山に生ふる草木や
地をいふ虫や四足や	空翔けりゆく鳥類も
其組織より動作まで	都て規律のあるものぞ
又萬物の皆共ふ	深き由來と變遷の
あらざる物いふまじか	鳥けだものや草木の
別を論ぜず諸共り	親ふ備へる性質は
遺傳の法で子に傳へ	適はるものい榮えゆき
適せぬものい衰へて	今の世界に在るものい
桔梗からかや女郎花	梅や櫻や萩牡丹
牡丹に緑の唐獅子	菜の葉に止まる蝶てふや

木の間囀る鶯や	門邊よあさる知更鳥や
雲居ふ名のる杜鵑	同ト友をば呼子鳥
友を慕ひて奥山に	紅葉ふみわけ啼く鹿や
譯も分らず貝の音よ	追はれてあゆむ牛羊
羊よ近き猿いまだ	愚ふことよ萬物の
靈とも云へる人とても	今の體も腦力も
元を質せば一様ふ	一代増ふ少しげ、
積みかさふれる結果ぞと	今古無雙の濶眼で
見極めたるいこれぞこれ	アリストートル、ニウトンリ
優に劣らぬ腦力の	タルウキン氏の發明を

これ小劣らぬスペンセル 同ト道理を擴張く
 化醇の法で進むのは まのあたりみる草木や
 動物而已ふあらばして 凡そありとくあるもの
 活物死物夫而已か 有形無形夫くくの
 區別も更ふあかりいと 真理極めし其知識
 感ずるも尚あまりあり されば心の働も
 思想智識の發達も 言語宗旨の改良も
 社會の事も皆都て 同ト理合のものなれを
 既ふものせろ哲學の 原理の論ぞ之よ次く
 生物學の原理やら 心理の學の原理をを

土臺とあして今更ふ 社會の學の原理をば
 書ふものさる、最中ぞ 此書よ載せて説かる、を
 そも社會とい何ものぞ 其發達の如何なるぞ
 其結構よ作用よ 社會の種類如何なるや
 種族と親と其子等の 利害の異同如何なるや
 男女の中の交際や 女子ふ子供の有様や
 取扱の異同やら 種々な政府の違ひやら
 違ひの起る原因や 僧侶社會のある故や
 其變遷の源因や 儀式工業國言葉
 智識美術や道德の 時と場所との異同ふて

遷り變りて化醇する
論述ふくして三卷の
最とも目出度き美舉よこそ
讀たる者の誰ありて
實ふ珍らしき良書あり
何あら何とせいのをやく
走り書きやらあら志やべり
天下の事いひと飲みと
新聞記者や演説家
人をあやまる罪とがの

其有様を詳細よ
長き文ふぞせらるべき
既ふ出でてたる一卷を
此書を褒めぬ者ぞふき
社會の事よ手を出して
責任重き役人
舌も廻いらぬくせふ
法螺吹き立て、利口ぶる
此書を読みて思慮あさば
少しの減りもほるならん

月日の事や星の事
夫等の事いきて置きて
疊一枚させばとて
長の年月年季入れ
出来る事いあらざるふ
年季も入らず學問も
新聞記者や役人と
か様ふ者が多けれを
尚不恐ろしき虚無黨の
揉めふ揉めたる其上句

動植物や金属や
凡そ天下の事業は
足袋を一足縫へばとて
寐る眼も寐ぞよ習いねば
獨り社會の事計り
もろふ及ばぬ譯ふれを
成るゝ最と最と易けれど
忽ち國ふ社會黨
起るゝ鏡ふ見る如し
虻蜂取らむの丸潰れ

秩序も建たず自由なく
再び浪風静まりて
百年足らぬ掛らんを
有様見ても知れたと
妄ふ手出しゆる勿れ
廣き世界の其中ふ
盲目同士の戦ふ
規ひきまらぬ棒打の
今の世界の旋風
烈しき中へつい一寸

泥海こそあるべけれ
大平海と成る迄は
革命以後の佛蘭西の
そこふ心が付きたらば
妄ふ志やべること勿れ
恐るべきもの多けれど
越したるものあらぬし
仲間入りこそあやうけれ
烈しく旋る時ふるぞ
絡き込まれたら運の盡

足も据へらば瞑眩めいけんき
ぐるくく廻まわいされて
上句のいてを空中へ
初て悟る其時の
後悔先き小立ぬあり
其吹く中へ過ちて
上手とこそいふべけれ
輿論を誘ふ人たちの
能く慎みまて軽卒ふ

頭いいとぐら付きて
すき間もあらば廻まわいされて
絡き上げられて落されて
早遅蒔まの辣椒
颶風烈しく吹く時の
船を入れぬが楫取の
政府の楫を取る者や
社會學をば勉強し
働かぬやう願ねがいしや

ロングフェロー氏兒童の詩

尚今居士

來れわらへばかたはらう	汝が遊ぶさま見れば
我等か多年苦みて	かほとけざり疑ひ
忽ち解けて露ほどの	曇りも胸ふ止まらば
汝が遊びたいる、を	見るに恰も東あふ
窓打あけて日ふ向ひ	さえづる鳥の聲聞て
清く流る、川水ふ	臨むが如き心地せり

流る、水も鳥のねも	照らほあさひも汝等の
心の如くゆたかあり	されど我等の心中の
かふしき秋も過去りて	寒き雪霜ふりふけり
わらへば無くば世の中も	如何ふ苦しきことあらん
わらへば無くばわれくの	後ふりむくも憂さばかり
前を望むもうばたまの	闇の夜中よ異ならば
知らばや茂る森の木も	いと美しきみどり葉ふ
清き空氣や日の光	其作用を施して

善き汁液を造り成し 幹と枝とを養ふを

知れよのどけき氣候をば りけて早くも感ぜるは

幹よもあらで軟かき 緑の葉ふそありぬるを

森を此世ふたとふれば 葉のわらうべふ比ぶべし

來れわらうべかたをらふ のどけき天を吹く風も

花ふ戯れ啼く鳥も 汝が清きこゝろよい

何如ある事を告るやを 我耳近くさゝやけよ

思慮をめぐらし智を竭し 我等が成せるわざとても

我等が書けるふみとても 汝が様のかをゆさふ

汝が面の樂しきふ 比ぶることのふるべきや

人の賞はる詩や歌の 世ふ數多くあるをれど

完全無虧の汝等ふ 及ぶべきものあらばかし

汝の生ける詩歌あり 他の皆死ふし言葉のみ

シエーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段

ヘンリー四世其初
 ランカストルのデウクたり
 一旦謀叛企て、
 六萬人の將として
 リチャルド王と戦ひて
 王を俘ふふたれバ
 自ら立て王と成り
 四方に逆威を震ひも
 天のいかでの亂臣を
 安穩ふての置くべきや
 禍亂交も起り立ち
 戦争止む時更ふかく
 ウエールス人の蜂起せり
 スコット人の攻め入れり
 ペルセー一家叛逆に
 王を暗殺謀る者
 其數最とも多かりき
 議院の權理打ち守り

王も烈しく抵抗を
 財政最とも困難く
 王の人望失ひて
 健康漸く衰へて
 其晩年よ至りてハ
 自ら悔ゆる其惡事
 心で心責められて
 安眠とてハ片時も
 夫れことあらぬ苦しさよ
 此一篇ハこれぞこれ
 其有様をうつしたる
 シエーキスピールの名作ぞ
 廣き世界の其中よ
 王者の數ハ多けれど
 ヘンリー四世あらざるを
 幾人ありや聞かまほし

山仙士

最と下賤なる我人の
今しも眠る其數の
あゝ羨し羨し
天より我に賜はりて
如何なる罪の祟みや
假令へ暫時の間あり共
瞼を閉ぢて眠らんと
そも如何なれば眠神
くまばりかへる稿の床
心地もよげよ横たはり

枕を高く高いびき
幾千萬かあるならん
眠の神よ眠り神
伽そるところ云ふべけれ
眠の神よ見いあされ
胸の苦くさ忘れたさ
如何よすれども眠られ
見る影もあきあむら家の
むさ苦くさも厭はず
枕のほとりぶんくくと

飛びくる虫の羽音さへ
すやく眠むるものなるふ
床の上なる天盖は
眠を誘ふ樂の音い
貴人高位の寢屋までは
實よ愚なる神ぞかし
不潔なる床小横たはる
王者の床小來らぬぞ
比べものふいふらぬのを
ゆらくゆる、帆柱の

眠りを誘ふ助ふて
伽羅沈香を炷き立て、
金襴緞子以て作り
最と心地よく聞ゆふる
何とて來ることのなき
何故よかく見苦しき
下賤なる者と寝いするも
金の時計と號鐘と
はていぶかき神の意ぞ
高き上ふも安く寝る

水夫の目をば閉ぢさして	情け用捨も荒浪や
吹き來る嵐凄しく	うぢ巻く浪を巻き上げて
天地どろろく浪音は	死人も覺むる程ふるふ
下の無間の地獄なる	高き柱の其上で
浪ふゆらめき眠らる	神の力を不思議ふる
摠身水ふひたされて	身を粉ふ碎く水夫ふは
斯く騒しき其折も	眠の神に付き添ふふ
草木も眠る牛三ふ	眠を誘ふ其工風
手を替へ品を替ゆるとも	王者の傍ふ來らぬ
依怙最負なる神ふこそ	あゝ幸多き賤の身の

寝ろや眠れや羨し	熟 ^ラ 思ひ合はすれば
^{うんぢり} 冠著たる頭程	苦 ^ク きもの世ふあらじ

シエークスピール氏ハムレット中の一段

尚 今 居士

あがらふべきか但し又	ながらふべきふ非るか
爰が思案のしどころぞ	運命いかふつたあきも
これふ堪ふるが大丈夫か	又さいあらで海よりも
深き遺恨ふ手向ふて	之を晴らばがもの、ふか
どふも心ふ落ちかぬる	叔も死んか死ぬるのは
眠ると同じ眠る間い	心痛のみか肉體の
あらゆるうきめ打捨たる	是ぞ望のいてあらん
ア、くぬ、ねむる、ねむる時	万が一ゆりみるあらむ

ハアとだわりが有るやうぢや	あぜと曰ふふ死よ眠り
無常の風ふさをそれて	此娑婆離れしまふとを
いかかる夢のきたるやら	ハテ疑の晴れぬもの
うき事長く忍ぶのも	これが為めかあなせられ
九寸五分さへ持ちたれを	其切先で一とつきふ
事をそますもやまけれど	之をい為さば慎みて
强者の非道世のそしり	驕れる人のいづかしく
想ふ美人の不深切	緩み過ぎたる國の法
貴人の無禮又たとひ	いかふ善しとも下人の
輕しめらるゝ是をふれ	堪へ忍ぶのい何故ぞ

重荷を負ひて汗流	ういめつらいめこらへは、
暮せぬ暮し暮れのも	亦何故ぞ是のみな
死後の恐れがあるからちや	死出の山路の不思議なる
登りて歸る人ぞふき	如何なる事のあるやらん
物にぞくこそ思はるれ	たとひ此世ふ止まりて
うきかんふんを嘗るとも	あの世の事の恐しや
斯くと心ふ思ふ故	たけき心も弱くふり
如何なる深き大望も	花を開かぬ枯れ失せて
實のあることぞふりける	左いさりながらオヒリヤよ
ア、たとやかふ其風情	そふたの神をいのるなら

わーが罪障わひてたべ

シェーキスピール氏ハムレット中の一段

山仙士

死ぬるが増か生くるが増あ
 つたふき運の情なく
 堪へ忍ぶが男兒ぞよ
 一そのことよ二つふき
 死んで眠りてそれぎりと
 さらりと去つて消え行くも
 一眠りにてつもりこゝ
 萬の艱苦それぎりふ

思案をするいふ、ぞかゝ
 うきめからきめ重なるも
 又もおもへばさいあらうで
 露の玉の緒うちきりて
 からきくろくき世の中を
 卑怯の業よあらぬかや
 胸の焦れや現身の
 去りて去らる、ものふらば

それよまされることふきも
 眠りて後ふ又や見ん
 死んで眠りて肉身を
 如何ふる夢を見ることぞ
 無情きせふながらへて
 もといと云へばのちの世の
 人の非道や下きみや
 公事訟の永引きや
 堪へ忍ぶい何故ぞ
 一本あれは何のその

死ぬる眠ると云ふもの、
 夢の行末おぼつかた
 離れい離れ行くもの、
 人の迷ふもことわりよ
 憂い目つらい目堪ふるも
 夢を恐る、故ぞかゝ
 叶いぬ戀の悲みや
 役人づらの権柄を
 ふまくら刃金鏞刀
 極樂往生出来ふなら

あだし命をまがらへて	重荷を擔 <small>か</small> て汗みづく
うんすと云いん馬鹿いふし	死ふんとして <small>い</small> も死 <small>し</small> も兼ねて
此世の憂目堪ふるも	十万億土とい云へど
方角さへふ誰知らぬ	人の歸らぬ國へ行き
飛んで火よ入る夏虫の	虫も知らさぬ恐怖い目ふ
逢ふのがいやさ恐ろしや	世間の人の思案して
臆病神よさそはれて	居へたる胸も小ゆるぎし
思ひ企つ大謀も	遂ふはたさず水の泡
もとを質せばとぞかこ	あ、愚 <small>とろ</small> さよ我ながら
くり言するも益ふしや	のうこれ <small>とろ</small> もう <small>う</small> 美 <small>う</small> しの

おへりや殿よ辨天よ	後生のねがひする時の
祈て給へ我罪の	亡ぶる様ふ頼むぞや

春夏秋冬

此詩の句尾ノ二字ヲ以テ二句ヅ、韻ヲ踏ミタルモノナリ例へバ「よろこむ」暖か」ノ如シ

尚今居士

春の物事よろこばし
吹く風とても暖か
庭の櫻や桃のえか
よみ美しく見ゆるか
野邊の雲雀いいと高く
雲井はるりに舞ひて鳴く
夏は木草の葉も茂り
百日紅も咲きよけり

夕暮かけて飛ぶ蟲は
集まり來たる軒のきを
人の我家を立出で、
あは涼むらんさよふけて

秋の尾花ふをみあへし
桔梗の花も開くべし
晴れて雲あき青空ふ
照らけ月影明かふ
されど何處も同トこと
寂しく見ゆる家の外

冬の雪霜いと深く
冷ゆる手足を暖く
あさん為とて爐火ふ
近く圍居をする時ふ
風の吹き入る戸のあをい
外の方見れば銀世界

新體詩抄初編 終

我國の昔より言靈ことばたまのさきいふ國といひ傳へて
 長きみどりあまき歌うたふ文ぶんふ妙たみある人も代々よ少か
 らば然しかるを今の文明の御代ごだいふあたりて短歌たんかは
 名ある人の彼是かきこゆれど長歌ながうたをよみ文かく
 人のをさくきこえざるいひとあやしくや海外
 の國々よても昔も今もうたといへを長きをむ
 ねとして軍陣いくさふうたひ祭祀まつりふうたひ哀樂あゐがくより
 たひて此道このみちふ妙たみある人代々よふたえげと云同い
 天地の間ふ生るゝ人のげふさもあるべき事ことな
 りかゝおのれ此比大學こゝふ入て大人たちの西洋せいやう

の詩を我が言葉ふうつせるを見て感慨不堪へ
ずいゝですたれたるを起してかゝる新代の風
をうたひ出ばやさて此道不妙ある人の出来た
らんふい實よことたまの幸いふ國の手ぶりを
著くはた海外の人も聞つたへてふどか彼の言
葉ふうつさゝらん然らひ國の光ともあるへき
事あらずやかくいふものは水屋主人幹文

明治十五年七月廿一日版權免許
同年八月出版
同十七年十二月十五日再版御届

撰者

外山正一

静岡縣士族

牛籠區築土前町廿番地

東京府平民

撰者

矢田部良吉

麴町區富士見町四丁目拾番地

福岡縣平民

撰者兼出版人

井上哲次郎

麴町區三番町四十八番地

出版人

東京府平民

丸家善七

日本橋區通三町目十四番地
神田區表神保町二番地

中西屋邦太

京橋區南傳馬町一町目

叢書閣

横濱辨天通四町目

丸善書店

大阪心齋橋通北久寶寺町

叢書閣

發兌書肆

100